

## 56 【街の散策からの気づき発見】

## 「春日部薬草園跡」散策

会員 K.T.

春日部市民文化会館の正面玄関前に「春日部薬草園跡碑」と「ミニ薬草園案内図」看板がある。図書館によく通うのに、じっくり見たことがなかった。碑には、「表：春日部薬草園跡 元国立衛生試験所 春日部薬用植物栽培試験場 裏：市民に春日部薬草園として親しまれた薬用植物栽培試験場の歴史

大正12年(1923)4月 内務省東京衛生試験所

薬用植物栽培試験園場として発足

昭和31年(1956)8月 厚生省国立衛生試験所

春日部薬用植物栽培試験場と改称

昭和55年(1980)1月 筑波研究学園都市へ移転のため閉場

建立 平成3年(1991)3月1日吉日 有志一同」とある。

「ミニ薬草園案内図」を見ると、現・文化会館、図書館、駐車場の敷地が薬草園だったようだ。敷地廻りの植栽に①から⑥の旧春日部国立薬草園樹木の名前が紹介されている。「ケヤキ」や「フジ」の名前もある。ネットで調べると、ケヤキは葉や樹皮に下痢止めや抗炎症作用を持つ樹木、フジは「藤こぶ」という樹皮にできる「藤こぶ」の部分と、種子を日干しにしたものが、口内炎や下痢止めの薬効がある、とあった。ただの植栽としてみているが、夫々薬用効果をもつ植物を選んで植栽としていたのだ。『そうか、先人達は、春日部薬草園跡を歴史の碑だけでなく、薬用植物も、「ミニ薬草園」として遺したかったのだ。』、と思った。

移転から46年が経過している。『当時の樹木はどのくらい残っているのだろうか?』、と思い、文化会館・駐車場・図書館の敷地廻りをぐるりと、見て巡った。樹木の成長を1年1cmを目安にすると、概ね、幹の太さは40cm~50cm になっていると推測される。結構、太い幹の樹木が残っている。大部分の樹木に名札がかかっているの、確認はしやすい。当時の人々の思いを受け、受け継いだ人達が世話を続けているのだろう。ミニ薬草園案内図で確認できない樹木もあったが、46年前に植栽されていた大部分の樹木たちは順調に成長しているようだ。『薬草の歴史は、いつからだろうか?』、と思い、調べてみた。和漢医学雑誌 14.69-80, 1997『日本における本草の歴史と民俗薬物学』 難波恒雄 富山医科薬科大学 のレポートを引用する。「(前略)わが国の薬物利用の始まりは、『古事記』にある大穴牟遲神(大国主神)が因幡の白兔を蒲黄(ガマの花粉)で治したこと、神産巢日神が大穴牟遲神の火傷に蚶貝(アカガイ)の貝殻を削った粉を蛤貝(ハマグリ)の汁に溶いて用いたという記事からでしょう。(中略) 充恭天皇3年(414)に天皇がご病気になり、新羅から金波鎮漢紀武という良医が送られ、病を治したと記録されています。このとき中国医学が初めて日本に伝来し、同時に薬物も入ってきたものと思われる。(中略) 推古天皇元年(593)に厩戸皇子(聖徳太子)は四天王寺を建立し、そこに療病院、施薬院などを併置し、医療制度の確立を行います。これは日本における初めての公的な医療施設といえましょう。太子は医療施設を造っただけでなく、積極的に薬物の備蓄にも力を入れ、同6年(598)には「薬草は民を養う要物なり、厚く之を蓄うべし」と奏して、勅命をもって薬草採集を奨励しました。(後略)」、とある。太子の時代には、既に薬草の種類が分かっていたようだ。奈良時代(710~794)に建てられた正倉院に伝わる『種々薬帳』には、植物・動物・鉱物など60種類の薬物が記載されている、という。薬用植物は人類の歴史の中で、「人体実験」の積み重ねから病に有効なものが伝承されてきたものだ。人と病の闘いは続いている。今は簡単に薬局で購入でき、化学物質の薬もあるが、薬は先人達の長い人体実験の結果から得た知識である。薬効植物達、それが薬に至るまでの先人達の歴史を忘れてはなるまい。



春日部薬草園跡碑



ミニ薬草園案内図



春日部市民文化会館



ミニ薬草園 植栽



市立図書館



ミニ薬草園のフジ